

「主体的に話し合い、自らの考えを深める道徳科の研究」

—道徳科の適切な評価方法を考える—

大阪市立上福島小学校 研修部

1. 研究主題設定の理由

本校では、平成30年度より道徳が教科化されることを見据え、昨年度より「主体的に話し合い、自らの考えを深める道徳科の研究」に取り組んできた。

初年度の昨年は、道徳教育の基本的な研修から始めて、発問や板書の工夫、動作化や役割演技を取り入れた授業に取り組んだ。これらは、道徳的状況や心情を考えるのに効果的であった。そのため、授業を通して、児童が道徳的価値に気付いていく様子を見ることができた。また、ペアやグループでの話し合い活動を授業に取り入れることで、主体的な話し合い活動を行うことができ、道徳的な考え方を深めることができた。

今年度は、道徳の授業における指導方法の工夫に加えて、年間指導計画に基づいた意図的・計画的な道徳科の指導を行う中で、確実な道徳性の育成を図りたいと考えた。そのため、道徳科が評価化されることを見据え、具体的な評価方法について研究することにした。そこで、研究主題を昨年度に引き続き、「主体的に話し合い、自らの考えを深める道徳科の研究—道徳科の適切な評価方法を考える—」とした。

2. 研究の趣旨

本校は児童数161名で、1年生は2学級、その他の学年は単学級の小規模校である。単学級で組替えもないため、子ども達同士がお互いのことをよく分かり合っている反面、人間関係が固定してしまう面もある。また今、校舎建て替えを伴う大規模工事中で、児童は運動場や体育館、プールもない不便な学校生活を送っている。休み時間に運動場で遊べないことで、廊下を走ったり、ストレスを訴えたりする児童も出てきている。

そこで、道徳科の学習を通して、道徳的思考や判断力を養うことは大切だと考える。研究2年目となる本年度は、道徳科が評価化されることを見据えて、「道徳科の適切な評価方法を考える」こととした。評価の視点を(1)状況把握や価値葛藤の場面で、ねらいにかかわる人間の弱さやもろさに向き合う(A児)(2)価値把握や価値確認の場面で、ねらいにかかわって高まりを実感する(B児)(3)高められた価値観で、自分自身を見つめ振り返る(C児)とした。そして3つの場面で、児童がどのような意見や考えを持ったか、授業の中でどのように意見や考えが変容していったのかを、児童の発言や道徳ノートの記事から見取るようにし、評価に繋げていった。また、本校では、特に注目したいタイプの違う児童3名をA児、B児、C児とし、研究授業の際に、教員全員で彼らの発言や道徳ノートに注目するようにした。そして、研究授業後の研究討議会では、教員が3つのグループに分かれて、A児、B児、C児の評価、つまり所見例を皆で考えるようにした。

3. 研究の概要

研究主題に迫るため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 主体的な話し合いの工夫

ペアトークやグループトークを取り入れることで、自信を持って全体で発表することができた。また、低学年では、役割演技や動作化を積極的に取り入れ、体や言葉で表現することで、ねらいとする

価値について、主体的に表現し、豊かに話すことができた。高学年では、考えの違う数名で話し合う対話法を取り入れることで、友達の意見を聞いて、考えを深めることができた。また、ネームカードを貼ってから、話し合いを進めることで、自分の意見と友達の意見を比べて話す力を育成することができた。

視点② 効果的な発問の工夫

指導書の学習指導案の主発問を参考に、授業のねらいに迫る「中心的な発問」を考えた。次に、「中心的な発問」の前後の発問を考え、全体を一体的にとらえられるように構成を工夫した。そして、最後に補助発問を考えた。授業では、児童の発言からキーワードとなる言葉を取り上げて、補助発問を効果的に使うことで、考えを深めたり、広げたりすることができた。

視点③ 評価の方法を考える

評価の視点を明確にし、道徳ノートに道徳的な感じ方や考え方を書かせることで、児童の心の変容をつかむことができた。また、研究授業においては、特に注目する児童3名を決め、板書に残した児童の発言や道徳ノートの記述から、具体的な評価を考えることができた。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 主体的な話し合い活動を行うことができた。役割演技を取り入れて、道徳的な感じ方や考え方に気付かせたり、ペアやグループでの話し合いを通して、道徳的な考え方を深めたりすることができた。また、名札を活用することで、自分の意見と友達の意見を比べて話す力を育成することができた。
- ねらいに迫る効果的な発問を考えることができた。また、児童の話し合いを深めるための効果的な補助発問を使うことで、主題に迫ることができた。
- 評価の視点（①ねらいにかかわる人間の弱さやもろさに向き合う。②ねらいにかかわって高まりを実感する。③自分自身を見つめ、振り返る。）のための場面や変容を見届けたい児童を実態に照らし明確にして、授業改善の視点や評価のあり方について研究を進めることができた。
- 評価の方法について具体的に追及した。評価の視点を明確にし、道徳ノートに道徳的な感じ方や考え方を書かせることで、児童の心の変容をつかむことができた。また、研究授業においては、特に注目する児童3名を決め、授業中の発言や板書に残した児童の発言、道徳ノートの記述などから、具体的な評価を考えることができた。
- デジタル教科書の朗読や紙芝居、挿絵を活用することで、視覚的・聴覚的に児童の興味・関心を引くことができることがわかった。

(2) 今後の課題

- さらに主体的な話し合い活動を展開するために、児童が友達の意見と比べて話したり、繋げて話したりする学び方を身につけさせていく。
- 効果的な発問の工夫について、さらに研究する。主題に迫る主発問と、児童の気持ちを引き出す補助発問や心情をゆさぶる補助発問を考える。

○同じ意見をまとめて書いたり、行動と気持ちを分けて書いたりするなど、児童の道徳的思考を活発にする板書構成にするための工夫をさらに考える。

○評価と指導の一体化を図れるようにする。板書に残した児童の発言や道徳ノートの記述から児童の評価をすると共に、授業の評価も行い、次の授業改善に努めていく。